

イヤンジ でんわ
李良枝からの電話

さんがつ お ちか どようび ゆうがた でんわ な どようび ぼく
3月の終わりに近い土曜日の夕方に電話が鳴った。土曜日は僕が
つと じょしだいがく しゅつこうび あさ いちねんせい じゅぎょう おし
勤めている女子大学の出講日で、朝から1年生の授業を教えていた。
しんじゅく かえ ま でんわ な じゅわき と
新宿のアパートに帰ってから間もなくして、電話が鳴った。受話器を取
ると、流れて来るのは若々しい女の声だった。少しためらいがちな「も
しもし」を聞いて、どのクラスの1年生だろうかと思ひ出そうとした。

あいて イヤンジ い ぼく おどろ
相手が、「李良枝です」と言ったとき、僕はほんとうに驚いた。

イヤンジ
「ええ、ほんとうの李良枝ですか」

イヤンジ
「ほんとうの李良枝ですよ」

い あいて じょしだいせい はっ わら ごえ も
そう言いながら相手は、やはり女子大生が発するような笑い声を漏
らしていた。

がんば
「リービさん、本をどうもありがとうございます……これからも頑張ってください」

ぼく だ しょじょさく いっさつイヤンジ おく あ
僕が出したばかりの処女作を1冊李良枝に送っていたが、まさか会
ったこともない小説の大先輩からわざわざ激励の電話が来るとは夢

おも あと にほんじん だいさんしゃ き
にも思わなかった。後になって、もし「日本人」の第三者が聞けば、

あくたがわしょうさつかん かんこくじん せんばい しょじょさく だ
芥川賞作家の「韓国人」の先輩が、処女作を出したばかりの「アメリカ

じん こうはい がんば げきれい
人」の後輩に「頑張ってください」と激励した、ということになるだろう

おも しゅんかん おどろ は ひさ
と思ったが、その瞬間はただ驚きと、恥ずかしさと、久しぶりのうれ

しさを感かんじたものだ。

そしてうれしさすら忘わすれさせるほど、僕ぼくがそれまで頭あたまの中なかで作つくっていた「李良枝イヤンジ」のイメージと、電話でんわから流ながれて来くるおおらかで若々わかわかしい声こえとは違ちがっていたのだ。

僕ぼくが抱いだいていた「李良枝イヤンジ」のイメージはもっとシビアなものだった。

李良枝イヤンジの文学ぶんがくには非常ひじょうに切実せつじつな問題意識もんだいいしきがあつて、その語かたり口くちも淡あわい炎ほのおのような力ちからを發揮はつきしていた。その代表作だいひょうさくの『由熙ユヒ』は、現代げんだいのどさっかの作家ひとよりも1つの認識にんしきの「矛盾むじゆん」——「日本人にほんじん」ではないのに運命うんめいとして日本語にほんごの感性かんせいの中なかでしか生きられないという「矛盾むじゆん」——を、単たんなる「矛盾むじゆん」というよりも、ある厳格げんかくな同時的認識どうじてきにんしきをもって追求ついきゅうした作品さくひんだった。しかも、いつか見た李良枝イヤンジの写真しゃしんを思い出おもすと、確たしかにソウルで韓国かんこくの伝統舞踊でんとうぶようを演えんじていたときの彼女かのじよの顔かおには、シビアなほどの集中力しゅうちゅうりょくとある厳きびしい知性ちせいが伝つたわって印象いんしょうに残のこっていた。しかし、さんがつさんがつの夕方ゆうがたの電話でんわから流ながれて来くる李良枝イヤンジの声こえは、そんな印象いんしょうと違ちがつて、とても明あかるい。一種いっしゆの軽かるみさえ感かんじさせたのである。

初はじめて話はなしをしているとは思おもえないぐらい、僕ぼくと李良枝イヤンジの会かい話わが弾はずんだ。ソウルから帰かえってきたばかりで、これからは大久保おおくぼの近ちかくに住すむ

ようになった、と言った。聞いてみると僕のアパートから歩ける距離だった。最近では人間文化の面でかなり空洞化してきた都心に、久しぶりに新しい知り合いが、これからは恐らく新しい友達になる人が近くに現れた、しかもそれが李良枝だと思おうと、さらにうれしくなった。

結局は1時間以上話し続けた。その間に、僕は前に『中央公論』のエッセイで『由熙』のことを少し論じてみたときの感想を思い出した。そのエッセイの最後に、ソウルへ行った在日2世の主人公が、自分には日本語の感性しかありえないことを「発見」した末に日本へ「帰」ってくるが、そんな自覚を持って「帰」ってきた人のそれからのストーリーをよ読んでみたい、というようなことを書いた。

李良枝がこれからどういう小説を書くかは知らなかったが、その小説を楽しみにしていたし、ソウルから帰ってきたばかりの在日作家自身の状況にも興味を持った。

電話の李良枝が僕のことを次々と聞いてくるのに、逆に勇気づけられて、僕が『由熙』を読み、そして僕たちの時代における「在日」の在り方を考えるうえでいちばん聞きたいことを、思い切って聞いてみた。「李さんはなぜ自分のことを『韓国系日本人』と呼ばないのですか」

イヤンジ そくざ こた
李良枝は即座に答えた。

「それはね、リービさん、『日本人』^{にほんじん}とってしまえば^{てんのう}天皇^{みと}を認めることになるでしょう」

それから、正確^{せいかく}なことばはもう僕^{ぼく}の記憶^{きおく}の中^{なか}ですすでにぼやけてしまったが、そんなアイデンティティーの立て方^たは「アメリカ的^{かた}」だ、というよう^{てき}なことを言った。「アメリカ的^い」^{てき}というのは、恐らく「移民的^{おそ}」^いという意味^{みんてき}もあつたと思^いう。李良枝^{おも}はきつと、彼女^{イヤンジ}が抱えていた豊かな「矛盾^{かのじよ}」^{かか}を、^{ゆた}「何々系何々^{むじゆん}」^{ちが}というふう^なに「解決^{なにないけい}」^{なにないけい}することを拒^{かいけつ}んでいたに違^{こぼ}いない。^{ちが}

最後に^{さいご} 李良枝^{イヤンジ}は、ソフトでおおらかな声^{こえ}で、
「だって韓国^{かんこく}は母国^{ぼこく}ですもの……」^いと言^いった。自明^{じめい}なことを述^のべるよう
に、そう言^いった。

僕^{ぼく}は「アメリカ」^{たい}に対して、絶対^{ぜったい}にそんな気持^きちにはなれない、と思^{おも}った。
母国^{ぼこく}ですもの……」

もし第三者^{だいさんしゃ}の「日本人」^{にほんじん}が聞^きけば、それは「日本人」^{にほんじん}の女性^{じよせい}の、歌^{うた}
うように美^{うつく}しい声^{こえ}だった。しかし、「日本人」^{にほんじん}の声^{こえ}ではなかった。

「近^{ちか}うちに会^あいましょう」ということ^{なが}で、長^{でんわ}い電話^きを、切^おるのが惜^おし
いという感^{かん}じで切^きった。3週間^{さんしゅうかん}たつて、李良枝^{イヤンジ}が37歳^{さんじゅうななさい}で急^{きゅうせい}逝

した。

ある^{どようび}土曜日^{ゆうがた}の夕方^{おも}に思いがけなくも^{なが}流^きれて来^{こえ}た声^{ざいにち}は、「在日」その
もの^{こえ}声^{ほく}として、僕^{きおく}の記憶^{なか}の中^{ひび}で響^{つつ}き続^{つづ}けているのである。

ひでお にほんご しょうり こうだんしゃ
リービ英雄『日本語の勝利』講談社より